



「昼間のおうち」

森の中で遊んでいると思った幼児が実は保育園の庭で遊んでいたと知って驚いたことがあった。その「森」の中の小さな赤い建物が保育園だった。十数年前のストックホルムでのことだ。当時、それは、ダーグヘム「昼間のおうち」と呼ばれていた。時間割も集団行動もなく、本当に昼間に行く「おうち」なのだ。なんて自由で楽しい幼年時代なんだろう。まだ小さかった自分の子供をここに連れて来たい、と思ったものだ。

そして、今年6月、南の都市・マルメに立ち寄った。夫と二人で朝の散歩をしているとき、19世紀初頭くらいの家並みで、小さな看板を見つけた。

鉄製で、絵柄はワインやメガネではなく子供が三人。商店ではないし何かな、と見とれていると彼が「保育園だよ」と教えてくれた。地名の続きには、確かにFörskolaと文字がある。

ダーグヘムという呼び名は10年くらい前から、このようになったとい

う。通りから見ると建物だけだが、昔の住宅街なので家に入れば、ゆったりとした中庭が見える。幼時には十分の広さだと思う。それにお散歩なら、すぐそばにマルメ城の公園がある。幼児は思い思いの服を着て、それぞれがそれぞれの遊びに熱中して、でもみんな仲良し。

この国では親以外に保育士、地域の相談員、お役所、国と、全体がひとつになって子育てをしている。「子供は未来を開く大切な宝物だから」と、こぞって言える社会。羨ましい。Förskolaは「就学前学校」と呼ばれているが、内容はダーグヘム時代と変わらずノビノビ保育。中庭ではみんな元気いっぱい。「子供の遊ぶ声がウルサイ」なんて人は、ここには居ないようだ。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。絵本に『イエータ運河を行く』、『風車がまわった!』、『一枚の布をぐるぐるぐる』など。北欧絵本『森はみんなの保育園』は2011年11月に発行(全て福音館書店)。

[ホームページ]

www.setsukufukai.com



「小さな村の喫茶店」

一年前の初夏、私はスコーネ地方南端の都市マルメから車で移動していた。目的地はヘルシンボリ。E6（ヨーロッパハイウェイ6）は真つ直ぐに延び快適だった。

でも、しばらくして、こんな美しい田園風景が一瞬で後方に飛び去るのはモッタイナイ、急ぐ旅でもないし。私と連れ合いはE6を少し離れてみることにした。

ひとたび車線を離れると、あたりは鳥の声が響く静かな田舎道だ。どこかで休みたいと思いつくころと走って行くと小さくカフェと書いてある家があった。

白い木製のドアを開けるとテーブル席がいくつもあったが誰も居ない。次の間を覗くとソファと低いテーブルの素敵なりビングルームがあった。でも誰も居ない。次々と奥の部屋へと進んで行くと、やっと人が居て珈琲コーナーがあった。

老紳士と若者数人が何かを作っている。ただ、どうも近所の人々が集まっている雰囲気ではない。ここはいったい何なのだろう。

熱いコーヒーを飲んで、私達も落ち着いてきたので老紳士に聞いてみた。

ここは、近隣に住む知的障害を抱える青年期の人がいっつも集まれる場所なのだという。一種のデイケアセンターだが、決まりごとはあまり無いらしい。だから青年達は中庭の芝生で休んだり、何か作ったり、めいめいが自由に行動してる。老人達は静かに見守る世話役だ。

おそらく地方行政のひとつの在り方だろうけど、肩肘張ったシステムではなく、自然にみんなが集まった感じが見えていて心地良い。

なにより「カフェ」と書いて旅人の私達まで迷い込むような雰囲気は素敵だと思った。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北政行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北政絵本に「イェータ運河を行く」、「風車がまわった!」、「森はみんなの保育園」、他の地域の絵本に「一枚の布をぐるぐるぐる」など。(全て福音館書店発行)。

[ホームページ]

www.setsukufukai.com



「水辺の夏休み」

ストックホルムはバルト海の入江の奥にある群島の都市。主な島々には橋やトンネルがあるので、中心部は電車・地下鉄・車でほぼ自由に行動できる。

ただ、都心部からバルト海に向かう長大な入江には、小さな島が数かぎりなくある。その光景は、まるで夜空の星を仰ぎ見るかのよう。

その島々の間を昔ながらの小さな蒸気船が元気に行き交っている。煙突から煙を出しトコトコと水上を走る姿が私は大好きだ。また、乗船してみるといつそう楽しい。まず、まどろみそうな揺れ具合が心地よい。船全体に風が吹き抜けるのが気持ちよい。そして、小型蒸気船は、島すれすれに走るので、手が届きそうなところに夏休みを過

ごす人々の姿を見ることが出来る。

水に飛び込む子供たち、ランチする人々、ヨットで出かける家族たち、体を仰向けにして陽を浴びる人々…。

それにしても、みなのおんびり過ごしているなあ。

子供たちは夏休みがたっぷり2ヶ月間、大人もたいてい5週間くらい休むとか。静かな水辺の夏休みです。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐるぐる』など。(全て福音館書店発行)。

[ホームページ]

www.setsukofukai.com



「セラピーとアートの子ども病院」

以前からずっとリンドグリーン記念小児病院を訪ねてみたいと思っていた。

今年の6月初旬、私はようやく視察する機会を得ることができた。

外来患者のフロアを抜けて子どもゲームや、本物そっくりに作った小さな点滴や注射器などがある。これは、遊ぶと同時に前もって治療の知識を得るためだとか。

絆創膏だらけのぬいぐるみもあった。子どもたちがそれぞれ自分で貼って「痛かったね」と声をかけてあげるらしい。また、カラフルな絆創膏を子どもたちが自由に貼り付けた「絆創膏アート」作品が壁に飾られていた。

共有スペースの奥には暗くて天井からキラキラ光が降りてくる部屋があった。まるで夜空の星がここに全部降りてくるような感覚になる。これは静かな気持ちになる部屋。二階の院内学校 (Skola) は

木の扉と立体の屋根が『やかまし村の子どもたち』の学校のように、また、廊下のあちこちに樹木のオブジェがあつて、小鳥が留まっていたりフクロウが首をかしげたり。どこを歩いても楽しいことに出会える。

私は5歳で入院生活を送った経験がある。子ども患者は、毎日が悲しくて寂しくて不安で一杯。もしこんな素敵な場所に行ったら、どんなに良かったらう。

このホスピタルアートは子どもの心にそっと寄り添い、豊かな想像力を感じさせてくれる。本当に素晴らしい小児病院だった。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に「エータ運河に行く」、「風車がまわった!」、「森はみんなの保育園」、他の地域の絵本に「一枚の布をぐるぐるぐる」など。(全て福音館書店発行)。

[ホームページ]
www.setsukufukai.com



「クリスマスはうちに帰ろう」

12月に入るとストックホルム市内はどこも活気づいてくる。新しいモミの木を手にした人、オーナメントを買いに出かける家族、沢山の人が行き交っている。

毎日ウキウキ気分で眺めていた私はイブの夜、ギョツとしたことがあった。街に誰も居ない！人が歩いていない！商店もレストランも閉まっている。でも、建物上部の住宅部分の窓辺からは明るい光が漏れているので、皆、家庭に入ってクリスマスを過ごしているのだと悟った。

昨冬、ストックホルムを訪れると、長くこの国に住む友人が「イブの前日、中央駅がこった返っていて大変だったわ」と言った。

ここ十数年のストックホルムは、中央部の中心を囲むように開発住宅群の発展がめざましい。居住者も驚くほど増えたこととおもう。

そして、ストックホルムは、東京のように巨大ターミナル駅がいくつもあるわけではない。中央駅ひとつだけ。北へ行く人も南へ向かう人も、この駅から出発する。だから故郷に向かう人は、この中央駅から出発することになる。

そう、クリスマスといえば、日本のお正月。両親や古い友人に会いたいにきまっている。キャンドルの光も一人で見るよりはみんなで見え方がずっと暖かいはずですね。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐる』など(全て福音館書店発行)。

[ホームページ]

www.setsukufukai.com